

- 号 1997年4月 40-43 財団法人入管協会
佐藤文明 『在日「外国人」特本』1993年 緑風出版
清水 勲, 湯本豪一 『外国漫画に描かれた日本』1994年 丸善
鈴木和枝 「マスコミのなかの性差別」『日本語学 5月臨時増刊号 世界の女性語 日本
の女性語』 Vol. 12, 1993年 206-211 明治書院
曹洞宗宗務庁編 『差別語を考えるガイドブック』1994年 解放出版社
高木正幸 『差別用語の基礎知識 96』1996年 土曜美術社出版販売
田宮 武 『マスコミと差別語の常識』1993年 明石書店
土岐 哲 「聞き手の国際化」『日本語学』 Vol. 13, 1994年 74-80 明治書院
中村桃子 「男女の言語学」『言語』1996年5月 大修館
沼田善子 「表記論として見たマンガのことば」『日本語学』 Vol. 8 1989年 53-59
明治書院
村上由美子 『イエロー フェイス ハリウッド映画にみるアジア人の肖像』1993年
朝日新聞社
ジョン・G・ラッセル 『日本人の黒人観』1991年 新評論
れいのるず=秋葉かつえ編 『おんなと日本語』1993年 有信堂

資 料

ルポルタージュ / ノンフィクション

- 相川俊英 『東京外国人アパート物語』1992年 新宿書房
朝日新聞学芸部 『あなたの隣に ルポ鎖国にっぽんの「外国人」』1991年 朝日新聞
社
石川 好 『ストロベリー・ロード』1988年 早川書房
岩本宣明 『新宿リトルバンコク』1996年 労働旬報社
江崎泰子, 森口秀志編 『「在日」外国人』1988年 晶文社
鎌田之保, 鎌田英隆 『にっぽん異人漂流記』1990年 PMC 出版
ギュンター・ヴァルラフ著 マサコ・シェーンエック訳 『最底辺 トルコ人に変身し
て見た祖国・西ドイツ』1987年 岩波書店
中原欽一郎 『ジーナの家 フィリピンからの花嫁』1994年 彩流社
毎日新聞東京本社社会部編 『じぱんぐ 日本を目指す外国人労働者』1990年 毎日
新聞社
梅 蘭 (メイ・ラン) 『ワタシ, 頑張るデス 上海娘の日本奮闘記』1993年 日新報
道
吉岡 忍 『日本人ごっこ』1989年 文芸春秋
吉永みち子, 瀬戸山玄 『お隣りの外国人』1993年 平凡社

マンガ

- 一条ゆかり 『有閑倶楽部』 集英社
高橋留美子 『らんま 1/2』 小学館
鳥山 明 『Dr. スランプ』 集英社

興味深かったのは、日本語を覚えはじめたばかりの人の話を聞くときだ。英語に混じって突然「センパイ・コウハイ」「ワのセイシン」「ジアゲ」「ホドホド」などという単語が飛び出してくる。(中略)

こうした、外国語と日本語が入り混じった生き生きとした面白さを、すべて日本語にしてしまったときに伝えられないのが残念でならない。」(p. 465-466)

この部分には、外国人の話す言葉に対する取り扱いの原則が明確に書かれている。それは相手の話し方を尊重して、編者は極力、手を加えないこと。通訳を介して話を聞く場合は、相手のことをよくわかっている人に頼み、細かいニュアンスまで汲み上げるように努力することである。

不必要な脚色や、「～人」という鋳型にあてはめることを避け、その人となり伝えるのにふさわしい言葉を探そうとする態度は、公正な報道のために、メディアにとって非常に大切なことではないだろうか。

8. 終わりに

今回の調査では、文字化された資料をもとに、外国人の話す日本語について考えてみたが、翻訳に現れる日本語については言及できなかった。標準的な話し方をしない話者の話す外国語(例えば、ドイツで働く外国人労働者のドイツ語、方言話者のことば等)を日本語を置き換えるとき、どんな日本語として実現されるのか。また、外国人女性の談話を伝える新聞記事が、女性ことばの特徴とされる終助詞の「～わ」を使用するのはなぜかなど、興味深い問題が山積みされている。

外国人の話す日本語を問題にするとき、聴覚的な印象は大変重要である。今後は、テレビ、ラジオ、映画などからも資料を収集していきたいと思う。

参考文献

- 上野千鶴子+メディアの中の性差別を考える会 『きっと変えられる性差別語』1996年 三省堂
 エバンズ年恵 「日本人(ネイティブ)による「外国人(ノンネイティブ)の日本語表現」考 『羅府新報』連載小説の休載理由をめぐって『月刊日本語』1995年10月号 96-97
 遠藤織枝 『気になることば-日本語再検討』1987年 南雲堂
 岡満 男, 山口効二, 渡部武達 『メディア学の現在』1994年 世界思想社
 ことばと女を考える会編 『国語辞典に見る女性差別』1985年 三一書房
 佐々木聖子 「国籍別役割分担?—外国人労働者のモザイクと情報網」『国際人流』119

96-97)

この事例は、外国人の話す日本語としてメディアに載せられた表現が、ステレオタイプ的で、民族差別にあたるとして糾弾された例である。外国人に対する差別という点、従来は用語や表現内容が問題にされることが多かったが、この事例からもわかるように、外国人がどんな言葉を話す人間として描かれているかという点にも十分注意を払う必要があるだろう。

7. 外国人の話す言葉に対する公正な取り扱い

この調査を行うにあたり目を通したルポルタージュやノンフィクションの中で、言葉の取り扱いについて十分な配慮がいきとどいていると思われるものが2点あった。それは、『「在日」外国人』と『日本人ごっこ』である。『日本人ごっこ』の作者はタイ語ができないので、取材にあたり通訳の助けを必要としたが、「タイの言葉を日本語に置き換えるときにニュアンスが崩れないようにと、こまかな注意を払ってくれた」と作者はあとがきで感謝の意を述べている。

『「在日」外国人』は日本に暮らす「ふつうの外国人」たちのなまの声を集めた大型インタビュー集で、世界35カ国からやってきた在日外国人約100人に、29人のインタビューチームが半年間にわたる取材をおこなってまとめたものである。「インタビューを終えて」というあとがきの部分には、言葉について次のような断り書きが載せられている。

「インタビューを進めていく中でいちばん懸念されたのは、やはり言葉の問題である。

日本語がしゃべれない人の場合は当然、通訳を介した。しかしそれぞれの国の母国語を日本語に置き換えるとき、その人らしい言まわしや細かいニュアンスをどれだけ汲み取ることができたのか、その点は今でも少し不安が残る。ただ、話し手の身近にいる結婚相手や仕事上のパートナーの方などが通訳をかって出てくださったケースも多かったので、より普段に近い感じは出せたのではないだろうか。(中略)

もちろん、話し言葉を文章にするときに、説明が少し不十分と思われるところは、話し手の真意を伝えるためにこちらで言葉を補った部分もある。しかしほとんどは、話された言葉そのままとあって差しつかえないだろう。文法的には多少おかしいと思われる箇所も、その人なりの表現としてそのまま収録した。

袋に書いてある値段を指差して、「500 円です」

どうも、私が値切っていることが分からないらしい。

「貴方泣く、いくら？」

「はあ？」

「私、たたく。貴方、負けるのこと」

「????」お店のお姉さんが、怪訝そうな顔で私を見えています。(p. 24)

上の例を見ると、文法の簡略化や普通体の使用、時制表現が使われていないこと等、他の国の出身者との共通点を持ちながらも、「動詞+のこと」という他では見られない言語形式が特徴的である。またこの本の『ワタシ、頑張るデス』という題も、中国出身を読者に印象づけているように思える。

マンガでは中国人の設定の登場人物が次のような日本語を話しているものがある。

「ご注文の品持て来たね」

「はっ、つい食べてしまった」

「それなにあるか」

「乱馬食べるよろし」(らんま 1/2 11 巻 p. 102-104)

この「～あるね」調の日本語が問題になって、新聞の連載小説が休載になってしまった事例を、エバンス年恵(1995)が報告している。

例 「欲張りないね。xx 不動産と xx 建設は車の両輪ね。その車に私たち夫婦が乗ってるよ」(『羅府新報』1995年5月1日付)

「これは、ロサンゼルスで刊行されている日系新聞『羅府新報』に連載中であつた、小説の登場人物のセリフの一部である。その登場人物は台湾の人となっている。この小説では、台湾出身の人物にはだれにもこの「～あるね・～ないね・～ないあるよ」調の日本語を話させている。そして、実はこの「～ないあるよ」調の独習日本語パターンが原因で、この連載小説は休載になってしまった。

連載小説休載の新聞告知を見て、もう少し詳しいことを知るため、新聞社に電話で聞いてみたところ、台湾出身の読者から『この小説のような日本語を台湾の登場人物が話すのは、台湾の人々を不当にやゆしているのではないか』という意味の抗議が新聞社にあり、抗議の意味を厳粛に受け止めて休載に踏み切った、とのことである。現在、新聞社は日本にいるこの小説の作家に、配信元を通じて表現の変更を求めているが、変更も簡単にできないようで、連載再開の見通しは今のところまだ立っていない、との話であった。」(p.

的や対象を示す「を」や「が」、主格の「が」、引用を示す「と」などはほとんど現れていない。それに対して、「ね」、「よ」といった終助詞は多用されており、しばしばカタカナで表記されている。また、動詞、形容詞、助動詞などの活用が十分に行われていない。

語順は、日本語の基本的な語順である述語が文末に来る「主語+目的語+動詞」という形になっている。

文の構造は、単文構造が主であり、複文や重文はあまり使われていない。

文体は、普通体と丁寧体の両方の例が見られる。待遇表現の使い分けは、かなり日本語が上達した段階で出てくると書かれている。(ジーナの家)

発音に関しては、今回のデータが文字で書かれたものを対象にしていることもあり、あまり、外国人訛りの発音を写したものはなかった。

6.3 中国出身者の話す日本語

アジアの国々の中で、中国出身者の話す日本語は、他の国と比べて特徴が目立つようにか書き分けられているように思える。次にあげるのは、日本で歌手としてデビューしようとして、上海から来日した若い中国人女性の日本滞在記である。文章は本人がワープロを使って、日本語で書いたと前書きに書かれている。以下の例は、来日後まもない時期に、日本語をしゃべる機会を積極的に作ろうとして日本人と話している会話である。(*印は中国人女性、無印は日本人女性)

例1 * 「私、梅蘭。上海から来る」

「そう。大変ね」

* 「貴方、年、幾つ」

「六十二」

* 「何してる」

「何も」

* 「百恵ちゃん好き。貴方嫌いか」

* 「夜来香、知っているか」(ワタシ、頑張るデス p. 22)

例2 お店で値切ることも覚えました。500 円の値段のついているオレンジの袋を手にとって、

「このオレンジいくら？」

お店のお姉さんが手をいっぱいに拡げて、

「500 円です」

「私、欲しい。買うのこと。いくら？」

れることがある。太平洋戦争中に日本語学習を強制された人々は、老人になってもカタコトの日本語を覚えている。食堂で話しかけてきた老人も、そうしたひとりだった。(日本人ごっこ p. 191-192)

例6 「ショウコチャーニ ニホンジン デ ダレカ イイヒト イナーイ? ショウカイ クダサイヨ」

母親が日本語教師だったというケン新宿のタイ人の中では頭抜けて日本語がうまい。(中略)

ケンが日本語で話し始めたから、そこにはソムオー(注:日本人の女の子でタイ語がうまい。本名は祥子だが、ソムオーはタイ語の愛称)以外には日本人はいないのに、なぜか日本語で会話が続く。学校で習わず、日本で生活しながら自然と日本語を身につけたタイ人はみんな、助詞抜きの独特の日本語を話す。つられてソムオーの日本語もおかしくなる。

「アナタ イツモオンナ オンナネ。スケベー」

「チガーウ コセキ ホシイネ」(リトルバンコク p. 10-11)

例7 「人にはやさしくて素直なのに、私にだけひどい。私がフィリピンだからいやなの、きっと」いくぶんたどたどしい日本語だ。(中略)

「娘、私のオッパイ、けた。まだ痛いよ」(あなたの隣に p. 6) (日本人と結婚したフィリピン女性)

例8 Oくんは意志的な眼を持つ19歳の男の子。(注:父親は中国残留孤児)インタビューの申し込みにとまどった様子で、「日本に来て2年になるけど、日本人の友だちはひとりもできなかった。きちんと話を聞いてくれる人は誰もいなかったんです。僕のことによければいろんなこと聞いてほしい」そう前置きしながら、ぼつりぼつりと話してくれた。来日2年目とは思えないような完璧な日本語だ。(在日外国人 p. 18)

例1から7までは、カタコトの日本語または独特の日本語として受け止められている発話の例である。これらの日本語を話している外国人の出身は、主にアジアの国々、および南アメリカに渡った日系人であるが、母語の違いに拘わらず、これらの日本語にはいくつかの共通点がみられる。

まず、正式な教育を受けずに、日常生活の中で独習した日本語だという印象を与えることである。第二言語習得研究で、自然習得と呼ばれる種類のものである。

次に、文法の簡略化が目立つ。例えば、格助詞が省かれていること、特に目

た。「ワタシたち、ガクセイ。コレカラガッコウユク」と一人がカタコトの日本語で話す。(じぱんぐ p. 121)

例4 「お父さん、ティン、一日でなおって、また仕事に出てルッテ」(中略)

「お父さん、ティン強いからだいじょうぶヨ」

「ジーナの妹だものな？」

「ハイ」

「ジーナ、この頃日本語だんだん正確になってきたな？」

「フッフッフ」

いつも口癖のように「日本語ムズカシイネエ」というジーナ(フィリピン)、それを意識してか、言葉にはたいへん気をつけているらしく、あらゆる機会をとらえて勉強に余念がないのがわかる。

日本人なら誰でも自然に使う、言葉と言葉をつなぐ、助詞と助動詞のつかい方が解らないらしく、かなり日本語の堪能な人でも、ヘンテコな言葉づかいが多いのは外国人全般にいえる。ジーナ自身もちろん例外ではなく、そこを苦労しているのだ。(ジーナの家 p. 179-180)

「…ジーナ(フィリピン)について俺はこう思うんだな。テレビ番組のドラマやテレビゲームを夢中でやるのは、いいことだよ。第一最近日本語が正確になってきているじゃないか。かかってきた電話の受け継ぎでも〈お父さん、お電話でーす〉っていうぞ。このあいだまで〈お父さん、電話だヨ〉それに今日なんか〈どちら様ですか?〉ってちゃんとした発音だぞ。ドラマ見て自然に身体で受け止めて覚えるのが一番いいんだ」(ジーナの家 p. 174)

例5 「コンニチハ。アナタ、日本人デスカ」

国境の橋のたもとにあった食堂で休んでいたとき、竹の編笠をかぶった老人が話しかけてきた。(中略)老人がしゃべっていたのは、たどたどしい日本語である。

「わたし、ビルマ人です。昔、大東亜戦争のとき、日本語を勉強しました。日本の兵隊さん、ビルマにたくさんいました。わたし、日本語、勉強しました。日本の兵隊さん、強かったです。歌、勉強しました。『うみ、ゆかば』、知ってますか。『勝ってくるぞ、いさましく』、知ってますか。わたしの上官、サイダさんでした。こわい人。すぐ『バカヤロー』、言いました。いま、メサイ、日本の見物の人、だんだんふえてきました。」

東南アジアの国々を旅行していると、日本語をしゃべる老人に話しかけら

カタカナで表記されるのは、実は外国人の話す日本語の部分だけではない。日本人が外国人と会話をしているときにカタコト風の日本語を話す部分も、カタカナで表記されている。次の例は、中国人留学生と日本人のタクシーの運転手の会話だが、カタカナになっているのは、日本人の話しているあやしげな日本語の部分だけで、中国人留学生の話言葉は漢字仮名混じりになっている。

- 例 「お客さん、外国の人？」タクシーの中で、運転手に話しかけられた。
 「はい、中国から」いきなり、運転手の言葉がカタコト風の日本語になった。
 「ギジュツ、勉強シニ来タデスカ？」「ボク、ヤモメ。アナタ、独身デスカ？」
 「あなたに何の関係がありますか」と、きつく切り返した。親しみの表現だろうか。が、膝さんには不快感がはるかに強かった。(あなたの隣に p. 60)

これも普通の話し方ではない日本語という側面を強調するための効果であろう。

6.2 外国人の話す日本語に対する評価とその特徴

ドキュメンタリーの中には、外国人の登場人物の話す日本語に対する、筆者の評価や感想が表現されていることが多い。その例を以下にあげる。()内は話し手の出身地を現す。

- 例1 色鮮やかな七夕飾りに、二世のルシア・ヤマウチさん(日系ブラジル)は、1989年訪ねた日本を思い出す。両親から聞いていた通り、ニッポンはいい国だった。「でもお嫁に行くかは、わからないネ。」たどたどしい日本語で、ニッコリ笑った。(あなたの隣に p. 120)
- 例2 サンデー(フィリピン)は高校を卒業後、母と一緒に、近所の農園主の家で洗濯婦として働いた。しかし収入は二人会わせても日に百ペソにしかならなかった。父のいない家族六人が暮らすには少なすぎた。「お金ない。お母さんかわいそうね。私が我慢すれば、お金になる思ったね」とサンデーはカタコトの日本語で言う。(じぱんぐ p. 79)
- 例3 目指す製本工場の五十メートルほど手前の道を、肩にナップザックをかついだ外国人の若者三人が歩いていた。「その三人、押えろ」先頭のマイクロバスにいるキャップから無線の指令が飛ぶ。(中略)
 居を衝かれたように立ち止まる外国人たち。三人はパキスタン人だっ

217 (8) メディアに現れた外国人の話す日本語

例 元気のなくなった男を見て、女（タイ出身）は、

「ゲンキ ダシテ。ノム ゲンキ デルヨ」と背中をさすりながら、タイ語では、

「つきあってるふりしてるだけ。本気の訳ないでしょ。……」と、好きなことを言って笑っている。（リトルバンコク p. 77）

カタカナ表記は、外国語音をそのまま書き写している部分にも見られる。

例 「チュンホア（中国人）？」

「ヌイタイ（少数民族）？」

暗闇の中に、ベトナム語のざわめきが広がった。（じぱんぐ p. 20）

同じように、日本語を話している途中で、外国語の単語を混ぜる場合も、その部分はカタカナで書き表される。

例 1 「この山の上のストーンにアートあるね。1800年前のペインティング。どうやって作ったのか不思議。誰もわからない。」（スリランカ出身）（お隣の外国人 p. 51）

例 2 「ウェルカム、ウェルカム。インカワのブラザーか。よう似てるじゃないの。体つきもオーライだ。いいヘルパーが来たのう。グッド、ベリー・グッド」（日系2世アメリカ人）（ストロベリー・ロード p. 45）

以上のように、外国人の話す日本語の異質さを強調する表記方法を取る本があるとともに、日本人の会話も外国人の会話も同じように普通の漢字仮名混じりで表記しているものも多い。『お隣の外国人』『あなたの隣に』『「在日」外国人』等は様々な背景を持つ外国人に取材しているが、ほとんど場合漢字仮名混じり表記で通している。

マンガのセリフを見ると、外国人の会話の書き表し方はもっとバラエティーに富んでいる。例えば、吹き出しの中のセリフを日本人の場合は縦書きに、欧米人の場合は漢字仮名混じりの横書きにするというもの（有閑倶楽部、サンクチュアリ）や、中国人の設定の登場人物のセリフを漢字だけで書き表すもの（Dr. スランプ）もある。例：「僕蛾悪勝多死」（ぼくがわるかったです）

外国人の話す日本語をカタカナで表記する理由は、その音声的な印象を強調するためではないかと思われる。沼田(1989)は、「表記論として見たマンガのことば」の中で、「カタカナ表記は、外来語表記に用いられるように、ひらがな等と比べ、より実際の発音、「音」に近いものとされる」(p. 54)と述べている。また、別の理由として登場人物の「キャラクターの明確化とも言えるかもしれない。」とも言っている。(p. 58)

例① 「オトウサン、ニホンノジ、ムズカシイ」(p. 79)

② 「お父さん、日本語、ムズカシイネエ、でもワカッタヨ」

ジーナの発音、ところどころ、お父さん、うん、でも、などが正確な日本語の発音になってきている。(p. 95)

③ 「イミのイミ……？ そんなのわからないワ」

「おお、ワが出てきたな、今までジーナはわからないヨだったろう。

そのワ、どこから覚たんだ？」

「お母さん」(p. 184)

この本では主人公のフィリピン女性の話す日本語に対する筆者のコメントがしばしば登場するが、それと同時にどんな日本語を話しているのかを視覚的にも表そうとしているように思える。カタコトの日本語はカタカナで、流暢さが増すに従って漢字仮名混じりに移行するという傾向が見られる。この本は、一人のフィリピン女性の日本語を書き分けている例だが、複数のいろいろな背景の外国人が登場する本でも、日本語の流暢さによって同じように表記法を使い分けているものがある。

例① 今度はユネス（イラン出身）が姿を現した。（中略）ギョロリと大きな目でこちらを睨んだまま、口を開かない。言葉もわからない感じだ。（中略）ところが、ユネスは靴をはくと、私に向かって、はっきりした日本語でこう言ってでかけていったのだ。

「オツカレサマデシター」

私は意表をつかれ、思わず笑ってしまった。おそらく、ユネスが覚えた数少ない日本語なのだろう。（外国人アパート p. 57）

例② ジョニー（バングラデシュ出身）がやって来た。長身で、色が黒い。こざっぱりした服装で、かなりのオシャレ。宇田川さんが私を紹介する。

「こちら、相川さん、うちのアパートにすんでいる、ジャーナリスト。今日、一緒に来てもらうから」

「よろしく」

「ハイ、よろしく」

しっかりした日本語が返ってきた。かなり、言葉がわかるようだった。（外国人アパート p. 50）

外国人が日本語を話すときはカタカナ、母語を話すときは漢字仮名混じりという使い分けをしてあるものもある。

前ページ表つづき

書名	著者	発行年	主な登場人物の出身
じばんぐ 日本を目指す外国人労働者	毎日新聞東京 本社社会部	1990	中国, ベトナム, フィリピン, パキスタン, タイ, 香港, バングラデシュ, マレーシア, イラン, 日系ブラジル人, アメリカ
ワタシ, 頑張るデス 上海娘の日本奮闘記	梅 蘭	1993	中国
日本人ごっこ	吉岡 忍	1989	タイ, ビルマ
お隣の外国人	吉永みち子 瀬戸山玄	1993	ベトナム, フィリピン, スリランカ, ブラジル, パレスチナ, インドネシア, エクアドル, ビルマ, 中国, ラオス, タイ, 在日韓国・朝鮮人

6. メディアに現れた外国人の話す日本語の例と分析

6.1 表記

外国人の話す日本語の表記法として、次のような種類が見られた。

- ① カタカナのみ
- ② 通常の漢字仮名混じり表記に一部カタカナが混じるもの
- ③ 通常の漢字仮名混じり表記

カタカナ表記の場合は、分ち書きをしたり、文節の切れ目に読点をふってあるものが多い。

例：「アナタ、ニホンジンデスカ？」

岸壁から飛び降りた私に一人のフィリピン人青年が話しかけてきた。

片言の日本語だ。

(中略)

「ワタシ、ニホンゴ、ベンキョウシテイル。ハナシ、シマセンカ？」(異人漂流記 p. 11)

この本では終始一貫して、登場するフィリピン人の会話をカタカナで表記している。

また、日本語の習得状況に応じて、上記の3種類の表記を使い分けているものもある。(ジーナの家)

も大勢のイラン人が海外に出ている。でも、それは観光ではなくて、ボクらのように出稼ぎなんだ』

こう語るとダネッシュは悲し気な表情で黙ってしまった。彼のカタコトの日本語と英語でも充分、私たちにその意味が伝わってきた。(『外国人アパート物語』 p. 30)

このダネッシュという男のセリフは、彼が話した日本語をそのまま書き写したのではなく、彼が言おうとしたことを作者が日本語で書き表したものである。という訳で、このセリフは純粹な a ではなく、むしろ b に近いものだと言えるだろう。

データを収集するジャンルとしては、主として 1980 年代以降に出版された在日外国人に関するルポルタージュ/ノンフィクションを中心とし、参考として新聞記事、マンガを扱った。使用したデータの出典は以下の通りである。

ルポルタージュ / ノンフィクション

書名	著者	発行年	主な登場人物の出身
東京外国人アパート物語	相川俊英	1992	イラン, タイ, バングラデシュ, 日系ブラジル 1 世
あなたの隣に ルポ鎖国 にっぽんの「外国人」	朝日新聞学芸部	1991	ベトナム, フィリピン, ラオス, カンボジア, 中国残留孤児 2 世, パキスタン, インド, パラグアイ, 中国, アフガニスタン, ベルギー, 在日韓国・朝鮮人, 日系ブラジル 2 世, タイ
ストロベリー・ロード 新宿リトルバンコク 「在日」外国人	石川 好 岩本宣明 江崎泰子 森口秀志	1988 1996 1988	日本人移民, 日系アメリカ人 タイ 中国, フランス, フィリピン, ドイツ, イギリス, ベトナム, アメリカ等 35 カ国
にっぽん異人漂流記	鎌田之保 鎌田英隆	1990	フィリピン
最底辺 トルコ人に変身 して見た祖国・西ドイツ	ギュンター・ ヴァルラフ著 マサコ・シェ ーンエック訳	1987	トルコ, チュニジア
ジーナの家 フィリピン からの花嫁	中原欽一郎	1994	フィリピン

もてるものとそうでないものがあり、同じ外国語話者であっても、どんなことばを話す人であるかによって、分け隔てが行われているということの一端をのぞかせている。」(土岐 p. 78)

このような話し手と言語のイメージ形成は、外国語だけでなく、同じ国内の方言および方言話者についてもみられる。土岐(1994)は、源氏物語、今昔物語、徒然草など優れた古典と言われるものの中にも、中央語話者による方言音蔑視の記述がそこそこに見られること、そして中央語を一段高いものとして扱い、一部の方言を一段低いものとして扱う考え方・感じ方が、現代の二十歳前後の若者の意識の中にも根強く存在しているように思えると述べている。(p. 76)

5. メディアに現れた外国人の話す日本語の調査

本稿では、外国人が実際に話す日本語の記述ではなく、メディアに現れた外国人がどのような日本語を話すように描かれているかを調査の対象とする。言い換えれば、日本人が外国人をどのような言語を話す人たちだと認知しているかという点を問題として取り上げるものである。

5.1 データ収集

メディアに現れた外国人の話す日本語のデータを収集するにあたり、今回は次のように範囲を限ることにした。まず、音声資料ではなく、文字化された資料をその対象とする。

次に外国人が何語を話しているかによって、以下のように2種類に分類する。

- a 外国人が日本語を話している場合: 外国人の話す日本語をどのように表記するか
- b 外国人がその母語もしくは日本語以外の言語を話している場合: 話している内容をどのように日本語に翻訳するか

本論では a を主たる調査対象とする。ただし、この a, b の区別は必ずしも厳密ではない。というのは、外国人が日本語と母語、または別の外国語を混ぜて話している場合に、その言わんとするところを作者が想像して日本語で書き表すことがしばしばおこるからである。例えば、次のような例がある。

「ダネッシュがビールを飲み干して、こう語りだした。

『イランは昔、金持ち国だった。たくさんの人が海外にでかけていった。皆、観光でだ。そこで札ビラを切っては大きな顔をしていた。時代が変わって、今

自分たちと異なる人間を識別する手段として、言語の果たす役割は大きい。古代ギリシア人が用いた異民族の呼称である「バルバロイ」は、ギリシア人達にとってわけのわからない異民族のことばの響きに基づくといわれ、「野蛮人」を意味する英語の barbarian の語源であるとされている。

現代でも、ある人間のイメージをその言語や話し方によって規定する、またはその逆に、ある言語にその話し手の持つイメージを投影させて実態を歪めてしまうということはよくおこっている。

『日本人の黒人観』の中で、ジョン・G・ラッセルは、E・Cというアフリカ系アメリカ人の次のような発言を紹介している。『日本人の見たがる黒人のイメージは偏っている。見たいものだけを見せ、他の部分を無視する。黒人らしさのステレオタイプが、日本人の頭のなかにできあがってしまっている。』こう述べてE・Cは次のような例をあげた。『黒人が映画に出ていると、どんなに上品な役を演じていても、日本語に吹き替えるときは、必ず訛った話し方にしてしまう。日本人が黒人に似つかわしいと思っている下品な口調にわざとかえてしまうのだ。』と。訛ったり下品な話し方をしないと黒人らしくない、と日本人は思っているのではないか、と彼は指摘する。」(p. 130)

4. 外国人の話す日本語の受けとめ方

土岐(1994)は、外国人が話す日本語を、日本人がどのように受けとめているかという点について次のような例をあげている。

「日本の大手自動車会社の工場長がタイからの技術研修生に会ったとき、『わたし…じどうチャ…』などと話しているのを聞いて、引率の日本人に『この人達は本当に仕事ができるのか』と心配そうに言ったというが、これなどは、『わたし じどうチャ』などという発音の仕方が、日本語では幼児の話し方に似ているところから、勝手に人格や能力の判断にまで結びつけて出された反応であったと先ずは解釈できよう。」(土岐 p. 78)

また、外国人といってもどのようなことばを話す人間であるかによって、日本人の受けとめ方が違うという例も引用しておきたい。

「ある日系ブラジル人留学生から、次のようなことを聞いた。『留学生同士で話しているときに、よく引き合いに出される冗談があります。それは、もし、日本人にもてたいと思ったら、英語を話すように日本語を話せばいいということです。アメリカあたりからの留学生のふりをすれば、すぐ友達ができる…』日本語話者の恣意的な判断基準の中に、同じ外国語訛りであっても、

として位置づけることができよう。

メディアが外国人のイメージ形成に果たす役割について『イエロー・フェイス—ハリウッド映画にみるアジア人の肖像』の中で、著者の村上由見子は、次のように述べている。「〈他者〉に対するイメージ形成には新聞、雑誌、テレビ、小説、広告と、各種メディアの果たす役割なくしては語れないだろう。メディアの働きは多様性という横の広がりと同時に、歴史的な流れの縦軸からも見ていく必要がある。イメージとは昨日今日作られたものでなく、過去から継承され累積されてきた文化遺産でもあるからだ。例えば、文化人類学者シーラ・ジョンソンはアメリカの戦中・戦後ベストセラー本の中から対日観の流れを探り、歴史学者ジョン・W・ダワーは太平洋戦争中に日米が互いに抱いた〈他者〉イメージを言葉の表現からマンガ表現に至るまで幅広く検証した。また日本側でもアメリカのテレビ報道に見る日本のイメージや、教科書における日本描写の変遷など、さまざまなアプローチからの調査報告がある。」(p. 4)

3. 外国人に関する報道の問題点と言語の役割

外国人に関する報道や出版物では、次のような問題点が従来から指摘されてきている。

- ① 名前の表記：姓と名の順序，漢字の読み方を日本式にするか原音に忠実にするか等
- ② 用語の取り扱い：例)「外人」/「外国人」
- ③ いわゆる差別用語といわれるものの取り扱い
- ④ 身体的特徴を誇張したような描写
- ⑤ ある特定のイメージに偏った内容

①～③は主として用語に関する語彙的な問題点であり、④⑤は内容に関する問題点だと言えよう。

メディアがどんな言葉で、何を伝えているかについて、情報の受け手である読者や視聴者は注意する必要がある。特に、情報伝達に使われる「ことば」について、近年フェミニズムの立場から鋭い問題提起が行われているように、(上野 1996, 遠藤 1987, ことばと女を考える会 1985, 鈴木 1993, 中村 1996, れいのるず 1993) 外国人をめぐる報道についても「ことば」を手がかりに分析を進めていきたいと思う。

メディアに現れた外国人の話す日本語

谷 口 すみ子

1. はじめに

新聞、放送をはじめとするメディアが、ある属性を持った人々を公正に取り扱っているかどうかについての検証が盛んに行われている。例えば、女性、民族、人種、職業、犯罪者などをメディアがどのように取り上げているかについて、多くの本や論文が発表されている。(上野 1996, 遠藤 1987, 岡他 1994, ことばと女を考える会 1985, 鈴木 1993, 曹洞宗宗務庁 1994, 高木 1996, 田宮 1993, 中村 1996, れいのるず 1993) 本稿では、メディアに現れた外国人像について、言語を中心に見ていきたいと思う。

2. 日本人の外国人観

現在、日本社会は、在日韓国・朝鮮人および中国人など、いわゆる旧来外国人である「在日」外国人住民に加え、1970年代末から急増した新来外国人(ニューカマー)との「共生」という課題に取り組んでいる。地域社会で、職場で、日本人が、異文化を持った他の民族集団の人たちと接触する機会が急激に増加した。そんな中で、日本人の外国人観はどのように形成され、変容していくのか。

異質な民族集団に対する恐れが社会不安を引き起こした事件が1990年頃に起きている。外国人による日本人女性乱暴の噂がそれである。1990年の夏頃から、埼玉県南部と、それに隣接する千葉県の一部に、「女性が東南アジア系の外国人に次々に襲われ、乱暴された」という噂が広まり、警察は広報紙などを通して、「そうした事件の届け出はいっさいない。悪質なデマだ」と全面的に否定した。しかし、その効果もなく、携帯用の防犯ベルを購入する市民が増えたり、また地域の自治会が女性に注意を呼びかける回覧板を回すなど騒ぎは、なかなか収まらなかった。これは、「日本人の外国人観、特に外見的に非欧米系と判断された外国人をどのように見ているか」(『差別語を考えるガイドブック p.47)を象徴する事件であったと言えよう。外国人についての良からぬイメージが一人歩きしてしまい、社会不安を引き起こした象徴的な出来事